

検出され、志津見地域における縄文時代農耕の存在が初めて確認されることとなった。

縄文土器におけるイネの粃痕の存在は、中国地方でも古くから知られている。県内では松江市・石台遺跡において晩期後葉の土坑から粃痕土器と炭化米が検出され、鹿島町・北講武氏元遺跡でも晩期後葉の突帯文土器に粃痕がみられた。県外でも米子市・青木遺跡や広島県・名越岩陰遺跡、岡山県・南溝手遺跡、同・福田貝塚などで後期後葉～晩期の粃痕土器が検出されており、少なくとも後期後葉までは稲の存在が遡るといえ、この時期から稲作が行われていたことが想定されている。

さて近年、土器の胎土や土壌のプラントオパール分析がさかんに行われており、後期後葉以前の土器や土壌からもイネやキビ、ヒエ等の雑穀類のプラントオパールが検出されている。うち最も古いものでは岡山県・朝寝鼻貝塚の前期前葉（羽島下層）の土層からイネのプラントオパールが検出され、縄文時代稲作の存在が前期にまで遡る可能性が示唆されている。

一方、志津見地域の遺跡でも土壌分析が行われている。志津見の遺跡では三瓶山火山灰により各黒色土がパックされており、他の時期のプラントオパールが入り込む余地がなく、層位ごとの土壌分析を行う上で最も適した環境といえる。板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡、五明田遺跡、神原遺跡、貝谷遺跡において分析が行われ、うち板屋Ⅲ遺跡と下山遺跡では第3黒色土までの土壌が分析された。結果、下山遺跡では第3黒色土層からキビのプラントオパールが検出された（詳細は第8章第6節）。さらに、板屋Ⅲ遺跡においては第3黒色土下層からイネのプラントオパールが検出され、イネの存在が早期以降にまで遡ることを示唆する結果となった。ここでイネなど穀類栽培の開始が一気に早期にまで遡ることを論じるつもりはないが、こうした事例を慎重に積み重ねておきたい。今後調査が進めば、各黒色土から炭化米や、あるいは黒色土直上から畑状の遺構が検出される可能性も秘めているといえるだろう。

下山遺跡では、これら穀物栽培の存在を示唆する遺物として、土掘り具とみられる打製石鋤が各黒色土から検出されている。また、第3黒色土から不整形で刃部がそれほど明瞭でないスクレイパーが検出されており（第163図2・3）、収穫具としての機能も想定されるものである。

第2節 中国地方の土偶について⁵⁰⁾

下山遺跡では、第1黒色土から東北地方より搬入されたとみられる「屈折像土偶」が出土し、大きな注目を集めた。また、第2黒色土からも在地系の土偶が1点出土しており、当地域における土偶の様相を考える上で節気となったといえる。ここでは、これまであまり語られることのなかった中国地方出土土偶を集成・整理し、地域性等について検討してみたい。

1. 土偶分布の現状

中国地方は九州地方と近畿地方の中間に位置し、両者を結ぶ重要な地域であるにかかわらず、土偶の出土数は他地域に比較して極端に少ない。第175図に土偶出土遺跡を表しているが、現在（2002年3月）のところ、中国地方における確実な出土例は18遺跡30点を数える。県別でみると、鳥取県2遺跡3点、島根県8遺跡12点、岡山県3遺跡9点、広島県2遺跡2点、山口県3遺跡4点である。各県ほぼ均等に出土しているが、島根県と岡山県が突出している（なお、わずか10年前の1992年の集計では7遺跡で12点であり、唯一島根県では出土例が確認されていなかった）⁵¹⁾。

2. 各土偶と遺跡の様相

次に、各土偶出土遺跡と出土土偶について外観してみたい。

○山陰地方

鳥取・森藤第2遺跡⁵⁹（第175図1） 遺跡は加勢蛇川と洗川に挟まれた扇状地に立地する。土偶は竪穴住居から1点出土し、分銅形土偶の下半部とみられる（第177図1）。両側面に刺突文、表面には正中線が施される。布勢式の土器を伴って出土している。

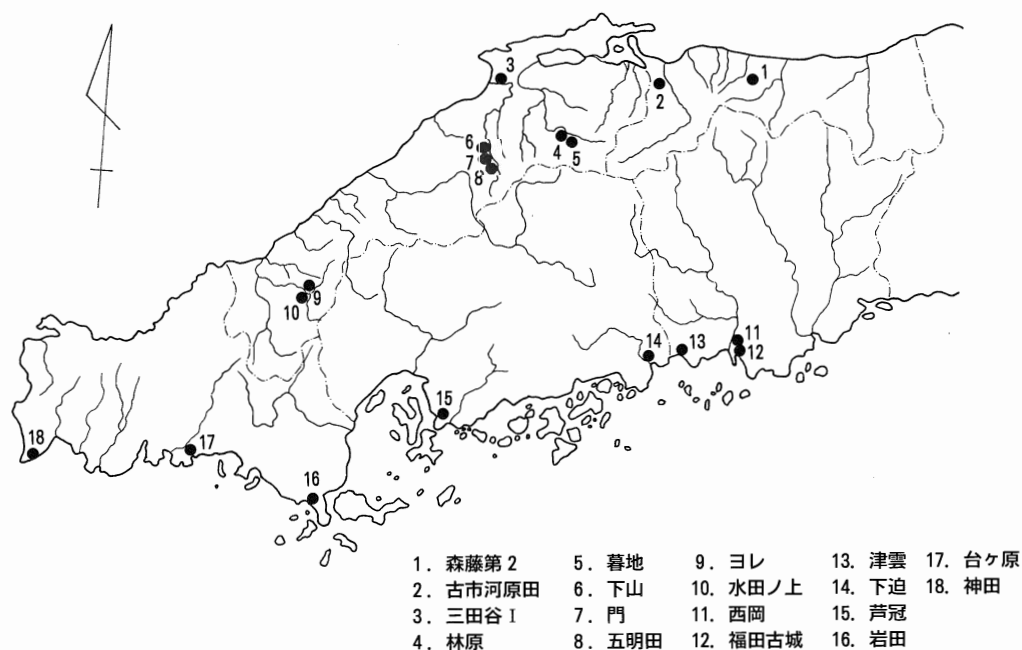
同・古市河原田遺跡⁶⁰（第175図2） 遺跡は米子市平野部に立地し、土偶は2点出土している（第177図2・3）。2は剥離破片で全体の形態は不明瞭である。弥生中～後期の包含層から出土しているが、正中線や乳房の表現があり縄文期のものと推測されるものである。3は右半部のみの残存であるが、底が平らで立つことができ、胸部には穿孔が施される⁶⁰。北白川上層式を伴って出土している。

島根・三田谷Ⅰ遺跡⁶⁰（第175図3） 神戸川下流域の低台地に立地し、土偶は1点出土する（第177図4）。頭部が表現されるほぼ完形の「分銅形土偶」で、正中線もわずかに確認できる。縄文後期～晩期の包含層から出土している。

同・林原遺跡⁶⁰（第175図4） 斐伊川中流域に立地し、トレンチ調査で土偶が1点出土している（第177図5）。頭部がつく「分銅形土偶」で、三田谷Ⅰ遺跡出土土偶に類似する。福田K2～布勢式を伴って出土した。

同・暮地遺跡⁶⁰（第175図5） 斐伊川中流域の河岸段丘に立地し、土器だまりから3点みつかった（第177図6～8）。6・7は「分銅形土偶」であるが、8は下端部が丸くおさまることから大型の「分銅形土偶」ともみうけられるものである。福田K2式古段階の土器を伴っている。昭和55（1980）年度の調査では、遺跡から倒立併置された2基の埋甕が検出されている。

同・下山遺跡（第175図6） 神戸川中流域に立地し、土偶は2点出土している（第176図9・10）。9は第2黒色土で出土した「分銅形土偶」の上半部で、頭部の剥離痕が残る。10は第1黒色土で出土した「屈折像土偶」で、四元～彦崎K2式を伴って出土⁶⁰。



第175図 中国地方の土偶出土遺跡

同・門遺跡⁸⁹（第175図7） 神戸川中流域に立地し、縄文後～晩期の土坑墓が多数検出される。土偶は土坑墓周辺から1点出土している（第177図11）。胴部のみの残存であるが「人形土偶」であり、頭部剥離面には芯棒痕がみられる。第1黒色土からの出土である。

同・五明田遺跡⁹⁰（第175図8） 下山・門遺跡と同様神戸川中流域に立地し、拠点的性格をもつ大規模集落遺跡と考えられる。土偶は貯蔵穴から布勢式平行の土器を伴って出土している（第177図12）。「分銅形土偶」であり、頭部剥離痕や正中線、肩部に沈線が2条施される。

同・ヨレ遺跡⁹¹（第175図9） 匹見川上流域の河岸段丘に立地する。後期後葉～晩期中葉にかけての大規模な配石遺構が検出され、土偶は1点出土している（第177図13）。小型で板状の土偶だが、分銅形土偶にくらべ頭部や腕部が明瞭に突出する特徴がある。

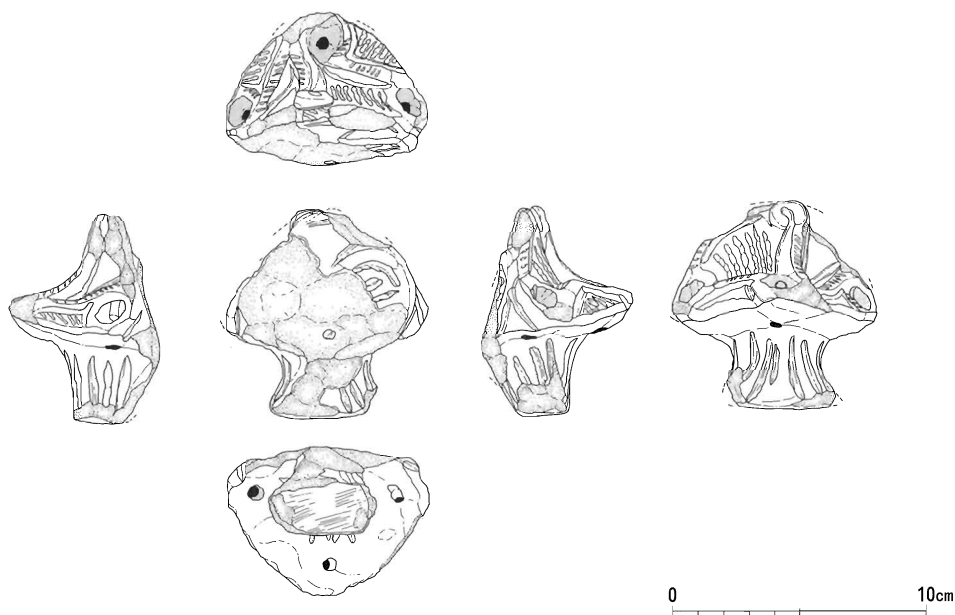
同・水田ノ上遺跡⁹²（第175図10） 匹見川流域の河岸段丘上に立地し、ヨレ遺跡と同様、大規模な配石遺構が検出されている。土偶は2点出土しており（第177図14・15）、14は遺跡隣接地で表採されたものである。ほぼ完形の板状小型土偶であり、臀部は丸くおさまるものとみられる。15は集石遺構内より出土したもので、胸部の破片とみられる。

○山陽地方

岡山・西岡貝塚⁹³（第175図11） 『人類学雑誌』（1992）で津雲貝塚出土土偶とともに報告されている（第178図16）。写真や図を見た限りでは「山形土偶」の脚部に類似する。

同・福田古城貝塚⁹⁴（第175図12） 土偶は3点出土している（第178図17～19）。層位的に区別でき、17・19は中津式、18は福田K2式を伴って出土しており、17は「小型人形土偶」、19は「分銅形土偶」の上半部とみられる。18は胴部片であるが、分銅形土偶であろうか。19は文様や頭部はみられない。

同・津雲貝塚⁹⁵（第175図13） 調査事例は古いが、1遺跡では最多の5点が確認できた（第178図20～24）。20は大型の土偶の頭部で、内面がソケット状になる。21も頭部とみられるが、詳細は不明である。22は脚部で16に類似するものとみられる。23は胴部で、頭部剥離面に芯棒痕がある。24は右腕部であり、腕部に粘土を巻き付けて胸部が表現されている。頭部剥離痕もみられる。20・



第176図 伝横田町出土土偶 S=1/3

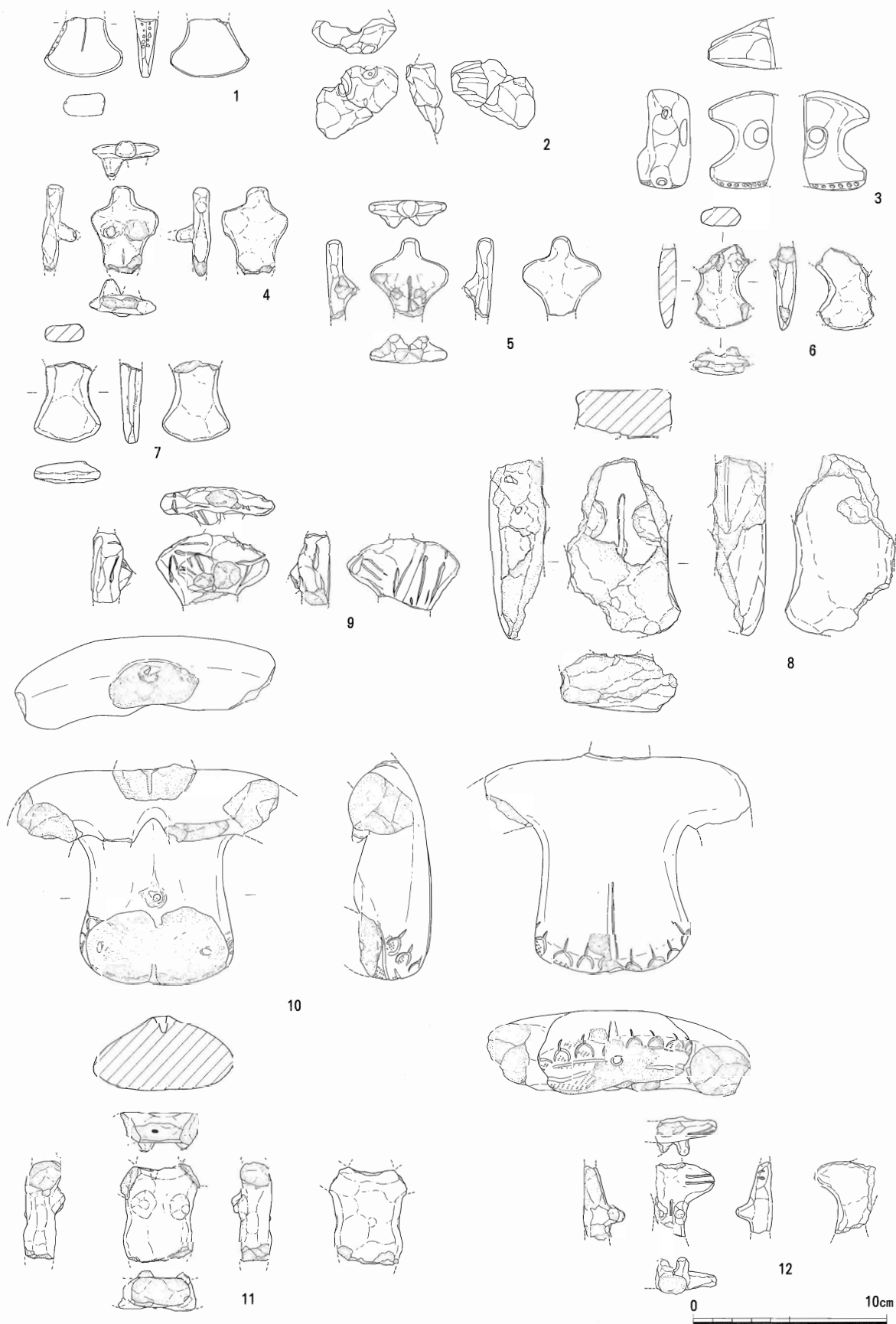
表9 中国地方出土土偶の一覧表

図版 No.	遺 跡 名	所 在 地	土偶の種類	大きさ (cm) 長さ×幅×厚さ	残存部位	特 徴	出土状況	時 期
【鳥取県】								
1	森藤第2遺跡	東伯郡東伯町	分銅形土偶 (2B類か)	3.1×4.1×1.1	下半部	正中線あり 側部に刺突文	竪穴住居内	後期前葉 (布勢式)
2	古市河原田遺跡	米子市古市		5.2×3.3×2.7	右半部	底面が平坦 胸部に穿孔	包含層	後期初頭～中葉 (中津式～彦崎K2)
3	〃	〃		3.7×4.2×1.6	左胸部?	正中線あり	包含層	中期後半～後期中葉? (～彦崎K2?)
【島根県】								
4	三田谷1遺跡	出雲市上塩冶町	分銅形土偶 (2C類)	4.6×3.5×0.9	下端部を若干 欠く	頭部表現あり 正中線あり	包含層	後期前葉 (福田K2～彦崎K1)
5	林原遺跡	仁多郡仁多町	分銅形土偶 (2C類)	4.1×4.1×0.9	上半部	頭部表現あり 正中線あり	トレンチ調査 で出土	後期前葉 (福田K2～彦崎K1)
6	暮地遺跡	〃	分銅形土偶 (2A類)	4.3×2.7×0.9	胸部～下半部	正中線あり	土器だまり	後期初頭 (福田K2古段階)
7	〃	〃	分銅形土偶 (2Bか2C類)	4.2×3.5×1.0	下半部	無文	〃	〃
8	〃	〃	大型の 分銅形土偶か	9.2×5.2×2.6	胸部～下半部	正中線あり	〃	〃
9	下山遺跡	飯石郡頓原町	分銅形土偶 (2C類)	3.8×5.8×1.5	上半部	頭部表現あり 正中線・刺突文	包含層	後期初頭～前葉 (中津Ⅲ式～彦崎K1)
10	〃	〃	屈折像土偶	11.4×13.9×4.1	胸部～下半部		包含層	後期中葉 (四元式～彦崎K2)
11	門遺跡	〃	人形土偶 (3B類)	5.2×4.0×1.7	胴部	頭部剥離面に 芯棒痕あり	包含層	後期中葉～晩期 (彦崎K2～突帯文期)
12	五明田遺跡	〃	分銅形土偶 (2C類)	3.8×3.2×1.2	上半部	頭部表現あり 正中線・沈線文	貯蔵穴内	後期前葉 (布勢式)
13	ヨレ遺跡	美濃郡匹見町	分銅形土偶 (2D類)	3.8×4.3×1.1	上半部	頭部・腕部が 明瞭 無文	包含層	後期後葉～晩期前葉 (～黒川式)
14	水田ノ上遺跡	〃	分銅形土偶 (2D類)	2.5×3.8×1.7	胸部	〃	集石遺構内	後期後葉～晩期前葉 (御領式～岩田Ⅳ類)
15	〃	〃	分銅形土偶 (2D類)	7.6×5.3×1.6	ほぼ完形	〃 陰部表現あり	表採品	〃
【岡山県】								
16	西岡貝塚	倉敷市西岡	山形系土偶か	長さおよそ7cm	左脚部	沈線・縄文	不明	不明 (後期中葉か)
17	福田古城貝塚	倉敷市福田古城	小型人形土偶 (1類)	3.6×5.0×1.4	上半部	列点文	包含層	後期初頭(中津式)
18	〃	〃	分銅形土偶 (2B類か)	3.2×3.3×0.8	腰部	正中線あり 削痕?	包含層	後期初頭(福田K2式)
19	〃	〃	分銅形土偶 (2A類)	5.1×5.8×0.8	上半部	無文	包含層	後期初頭(中津式か)
20	津雲貝塚	笠岡市西大島	人形土偶 (3A類)	6.7×8.2×3.8	頭部	ソケット痕	不明	不明 (晩期か)
21	〃	〃	人形土偶か	4.5×4.7×2.1	頭部か	沈線 刺突文	不明	不明 (晩期か)
22	〃	〃	山形系土偶か	長さおよそ7cm	脚部	沈線 縄文	不明	不明 (後期中葉か)
23	〃	〃	人形土偶 (3B類)	4.1×4.3×2.0	胴部	頭部剥離面に 芯棒痕・正中線	不明	不明 (晩期か)
24	〃	〃	人形土偶 (3A類)	8.3×3.4×2.0	右腕～右胸部	沈線	不明	不明 (晩期か)
【広島県】								
25	下迫貝塚	福山市柳津	分銅形土偶 (2C類)	7.9×4.2×1.0	ほぼ完形	正中線・沈線 あり	不明	後期前葉か (船元～彦崎K1式)
26	芦冠遺跡	呉市広	分銅形土偶 (2Bか2C類)	3.6×3.5×0.7	胸部～下半部	正中線・沈線 縄文あり	不明	後期前葉か
【山口県】								
27	岩田遺跡	熊毛郡平生	分銅形土偶 (2D類)	4.5×4.0×1.4	上半部	眼部が突起	不明	不明 (後期中～後葉か)
28	〃	〃	人形土偶 (3A類)	5.5×6.1×2.9	胸部	貫通孔あり	不明	不明 (晩期か)
29	台ヶ原遺跡	防府市佐野	分銅形土偶 (2A類か)	3.1×3.3×0.8	右胸部	無文か	トレンチ調査 で出土	不明 (後期初頭～前葉か)
30	神田遺跡	下関市富住	分銅形土偶 (2B類)	4.5×4.7×0.8	上半部	列点文	土坑内	後期前葉か (福田K2～津雲A式か)

21・23・24は「人形土偶」であり、22は「山形土偶」の脚部に類似するものである。

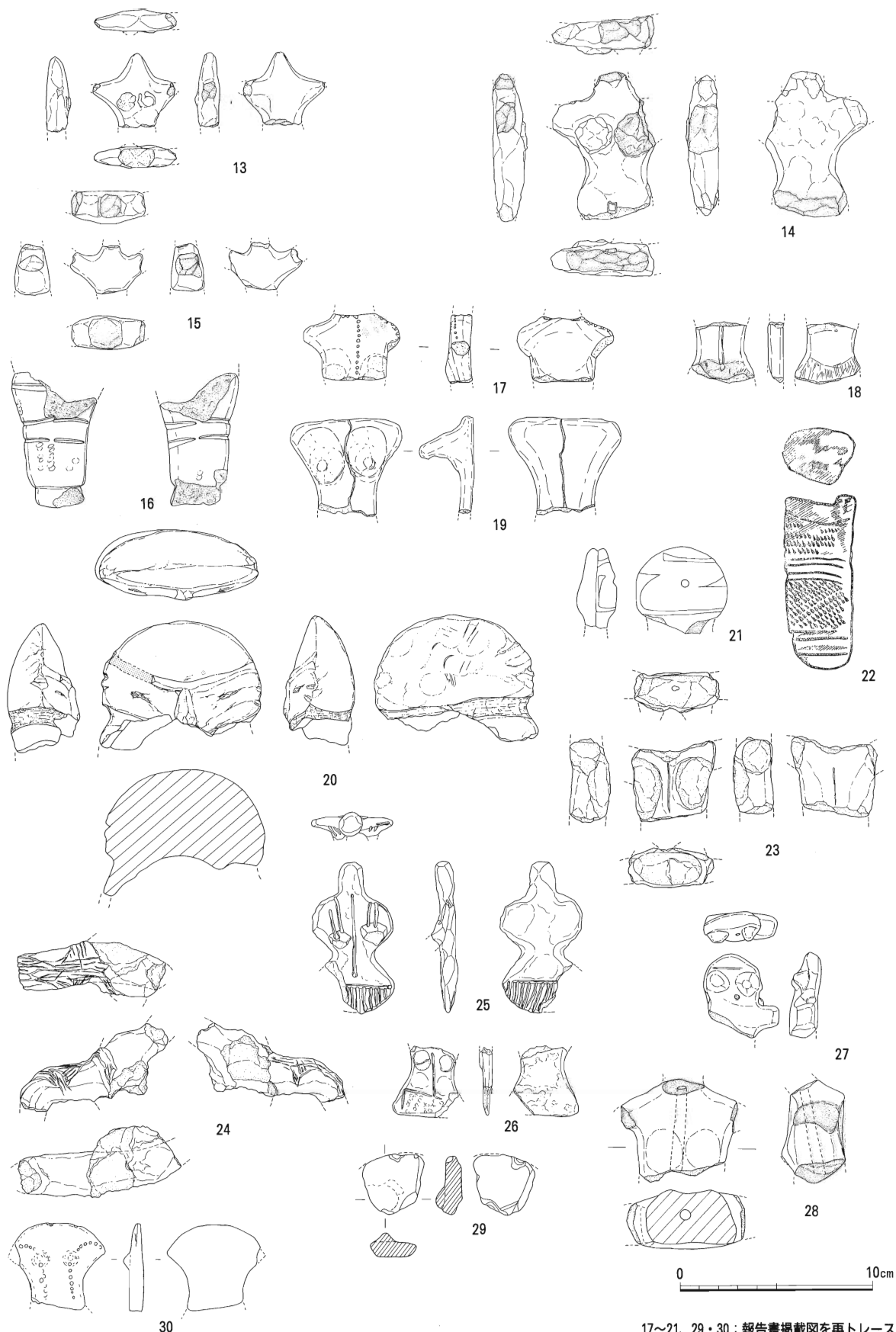
広島・下迫貝塚^㉓ (第175図14) 瀬戸内沿岸部に立地する。土偶は1点みられ (第178図25)、調査事例は古いが後期前葉の土器を伴って出土したとみられる。全形がわかる「分銅形土偶」として貴重である。

同・芦冠遺跡^㉔ (第175図15) 遺跡は工事中に発見されており、遺跡の全容は不明である。「分



1: 森藤第2 4: 三田谷 I 6~8: 暮地 11: 門 1~3: 報告書掲載図を再トレース
 2・3: 古市河原田 5: 林原 9・10: 下山 12: 五明田

第177図 中国地方出土土偶 1 S=1/3



13: ヨレ
 14・15: 水田ノ上
 16: 西岡貝塚
 17~19: 福田古城貝塚
 20~24: 津雲貝塚
 25: 下迫貝塚
 26: 芦冠
 27・28: 岩田
 29: 台ヶ原
 30: 神田
 17~21、29・30: 報告書掲載図を再トレース
 16: 東京大学総合研究博物館収蔵
 23・24: 京都大学総合博物館収蔵
 26: 呉市入船山記念館収蔵
 22: 縮尺不明

第178図 中国地方出土土偶 2 S=1/3

銅形土偶」とみられる土偶が1点出土している（第178図26）。

山口・岩田遺跡^㉒（第175図16） 遺跡は荒木川の扇状地に立地し、土偶は2点出土している（第177図27・28）。タイプが異なり、27は小型の板状土偶で、突起による乳房表現が眼部表現に転化している^㉒。28は「人形土偶」の胴部で、いわゆる「消化管」を表現した貫通孔がみられる。

同・台ヶ原遺跡^㉓（第175図17） トレンチ調査で土偶が1点出土している（第178図29）。上辺のカーブと乳房状突起から「分銅形土偶」の胸部片とみられる。

同・神田遺跡^㉔（第175図18） 土偶は1点みられ（第178図30）、土坑から後期前葉の土器を伴い出土している。「分銅形土偶」の上半部で、頭部や正中線はみられないが列点状の連続刺突が施されている。

島根・伝横田町出土土偶^㉕（第176図） この他、採集品とみられ、出土地など詳細は一切不明の土偶顔部が存在する。顔面を欠損しているが、縄文中期後葉の唐草文土器に伴う唐草文土偶に類似する。仮に横田町出土品であるなら「屈折像土偶」と同様に搬入品である可能性が高いが、定かでない。

3. 中国地方出土土偶の分類（数字は図版番号に対応）

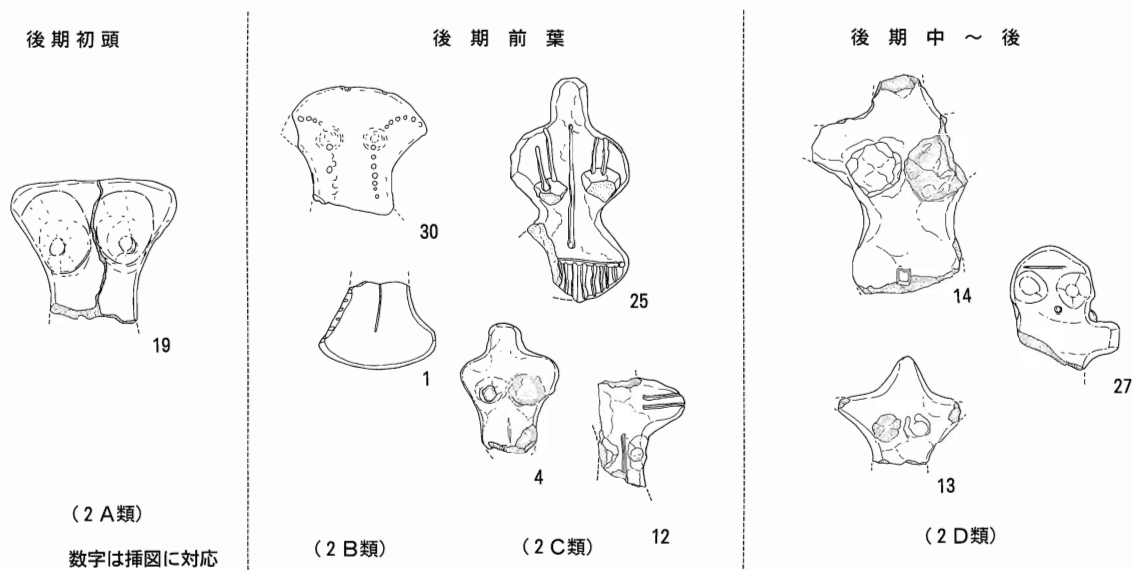
当地方における土偶は、伝横田町土偶を除き、確実に出現するのは後期初頭からと考えられる。数は少ないながらも様々な形態の土偶が存在しており、以下のように分類する。

1類：小型で板状ながら頭部や腕部が明確に表現される「小型人形土偶」をいう。福田古城貝塚（17）が中津式を伴って出土しており、当地方における出現期の土偶と考えられる。今のところ1類とみられるのはこの1点のみである。

2類：小型の板状で突起による乳房表現があり、胴部がくびれ四肢が省略される「分銅形土偶」をいう。福田古城貝塚（19）が最も古く、福田K2式を伴って出土している。前葉にかけて数が増加し、三田谷I遺跡（3）や林原遺跡（4）、下迫貝塚（25）のように頭部表現がつくなどの変化がみられるようだ。また、ヨレ遺跡（13）や水田ノ上遺跡（14）のように人形と分銅形の折衷形態の土偶もあるが、（14）のように臀部が丸く収まる形態は（4）・（25）に類似することから、2類のバリエーションと考えられる。乳房が眼部表現に転化した岩田遺跡（27）もこれに含めたい。この他、森藤第2遺跡（1）、暮地遺跡（6・7）、下山遺跡（9）、五明田遺跡（12）、芦冠遺跡（26）、台ヶ原遺跡（29）、神田遺跡（30）が2類に含まれる。

3類：ひとがたの意匠をもち、山形土偶の系譜を引く「人形土偶」（以下、山形系土偶）をいう。西岡貝塚（16）、津雲貝塚（22）の脚部は写真・図面を見る限りでは山形土偶そのものと見受けられるが、詳細は不明である。典型なのは津雲貝塚（20・24）や岩田遺跡（28）で、粘土紐を用いた顔部表現やソケット状の構造、消化管が施される特徴が近畿地方の樫原遺跡出土土偶に類似している。また、門遺跡（11）や津雲貝塚（23）の胴部も山形系土偶が小型化したものとみられる。津雲貝塚（21）も図面を見る限りでは3類の顔部とみられる。

以上のように、当地方の土偶はおおむね3類に分類されるが、これらにあてはまらないものも数例みられる。下山遺跡（10）は搬入品であり、「屈折像」ではあるが、形態や文様は関東地方や周辺部に分布する山形土偶そのものである。古市河原田遺跡（2・3）はいずれも特異な形態の土偶である。（3）の底部が台状で胸部に穿孔が施される形状は近畿地方の終末期土偶である「台式土偶」に類似するが、（2）の相伴土器の下限は後期中葉である。暮地遺跡（8）は胴部のみの残存であるが下端部が丸くおさまるとみられ、大型の分銅形を呈する土偶とも考えられるものである。



第179図 中国地方における分銅形土偶の形態変化

復元すると長さ12cmは下らないものであり、上半部の剥離面には芯棒痕らしき穿孔も確認できる。

4. 土偶の分布と時期的変遷

当地方の土偶は、共伴土器が不明で細別時期が特定できていない資料が多いが、時期が押さえられるものを中心に土偶の形態から変遷を追ってみたい。

1期：後期初頭（中津～福田K2）…6・7・8・17・18・19

当地方における土偶の出現期で、1類（14）次いで2類（16・17）が現れるようだ。（16）は頭部や正中線などの文様がなく、このタイプが2類の最古型式の典型と考えられ、2A類としたい。また、福田K2古段階（島1式）の土器を伴い暮地遺跡（6～8）が出土しているが、（6）は正中線がみられ、（7）は無文である。1・2類とも瀬戸内沿岸部で成立したと想定される。

2期：後期前葉（布勢式～彦崎K1）…1・4・5・9・12・25・26・29・30

1類は今のところ後期初頭の（14）しか出土例がなく、後続しないと考えられる。2類は数が飛躍的に増加する。（1）・（4）・（5）・（6）・（9）・（27）が土器を伴っており、この時期に比定される。また搬出遺物はないが、形状が類似することから（22）・（23）・（26）もこの時期と考えられる。体部には沈線による正中線の表現をもち、列点文や沈線文が施される。また、他地域に例をみない頭部がつくタイプとつかないタイプがあるが、頭部がつくものが大半を占めるようだ。頭部がつかないものを2B類、頭部がつくものを2C類としたい。

3期：後期中葉（彦崎K2～元住吉山I）…10・16・22

東日本からの影響がみられはじめる時期である。「屈折像土偶」（10）は彦崎K2式を伴い、瀬戸内の（16）・（22）も山形土偶であるならこの時期に比定される。また、2期にあれだけ盛行した2類であるが今のところ確実にこの時期といえるものはなく、3期になると激減する感がある。

4期：後期後葉（元住吉山II～宮滝）…13・14・15・27

確実にこの時期の土器を伴う土偶は一切みられない。しかしながら、板状でよりひとがたを呈する（13）・（14）・（15）・（27）は2類から派生したと考えられ、出土遺跡の盛行時期も後期後葉から始まるのでこの時期に比定した。これらを2D類としたい。

5 期：晩期前葉（岩田Ⅳ類・滋賀里Ⅰ～Ⅲ a）…20・24・28

4 期と同様、確実にこの時期といえるものはみられない。ただ、近畿地方で土偶が増加する時期であり、3 類の（20）・（24）・（28）は橿原遺跡出土土偶⁹⁶に類似することから、この時期と推測される。これらを 3 A 類とする。なお、山陰地方には 3 類がみられない。

6 期：晩期中葉～後葉（篠原式～突帯文）…11・23

時期の押さえられる土偶はなく、資料数も少ないので時期の細別は困難である。（11）と（23）は形態や頭部の芯棒痕が共通しており、同タイプと考えられる。（11）は後期中葉を遡らないので、3 A 類が小型化したものとして後続時期に比定した。これらを 3 B 類とする。

以上のように、当地方の土偶は 1 期に瀬戸内沿岸で 1・2 A 類が出現し、少し遅れて山間部でも 2 A 類が出現する。2 期には 1 類は姿を消すが、2 類は山陰地方山間部を中心に飛躍的に分布が広がり、文様や形態も頭部が表現されるなどの変化がみられる（2 B・2 C 類）。3 期には山形土偶に類似するものや「屈折像土偶」が搬入されるなど、東日本の影響が強くみられるようになる。2 類は確実なものはみられないが、4 期にかけてよりひとがたを呈するようになる（2 D 類）。5 期以降は瀬戸内沿岸部で 3 類が盛行し、逆に山陰側では土偶の分布が希薄になると想定される。

5. 中国地方出土土偶の地域性について

近年、1・3 類については全く資料増加の気配がないが、2 類の分銅形土偶は山陰地方山間部を中心に増加傾向にある。分銅形土偶は西日本の後期を代表する土偶であり、各地域で編年が示されている⁹⁷。それによると京都府日野谷寺遺跡から中津式に伴って出土したものが最古例であり、前葉から中葉にかけて九州東北部～近畿地方から東海・北陸・熊本地域まで分布を広げ、後葉にはほぼ全域で消滅する。その形態の変化についても、前葉には乳房や正中線が表現されるものが中葉にかけて乳房無・有文化が進み、中葉以降は土版化することが指摘されている。しかし当地方では、今のところ確実な中葉（3 期）における 2 類の出土例はなく、分銅形を呈するような土版類も確認されていない。注目したいのは 2 期の（4）や（25）のように頭部がつくタイプ（2 C 類）と、（30）のように頭部がつかないタイプ（2 B 類）の存在である。前者は明らかに抽象的表現からヒトの意匠への変化を示すものであり、土版化とは逆行した動きといえる。この形態変化が（13）・（14）のような分銅形と人形の折衷形態の土偶に繋がるとみられ、中国地方でも特に「人形土偶」が定着しなかった感のある山間部の土偶の地域性と考えられる（第179図）。

以上、中国地方出土土偶の形態や編年、地域性等にまとめてみたが、当地域の土偶研究は初歩段階であることはいうまでもない。この土偶の分類も、将来的に資料の増加の際には組み替えされる可能性が多分にある。また、後期初頭の土偶出現の背景や、後期後葉から晩期前葉にかけての九州・近畿地方との関係、終末期から弥生期にかけての人面付き土器との関係、さらには「屈折像土偶」が搬入された背景など、検討すべき課題は多い。

第 4～7 章（註）

（1）島根県教育委員会『板屋Ⅲ遺跡』1998

（2）島根県教育委員会『神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡』2000

（3）松本岩雄・正岡睦夫編『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』1992

- (4) 石器の石材は、島根大学文学部・飯泉滋氏、同汽水域研究センター・竹広文明氏に鑑定を依頼した。なお安山岩の分類については、第8章第4節を参考にされたい。
- (5) 磯前順一 「『屈折像土偶』について」『考古学雑誌』第72巻第3号 1987
- (6) 磯前順一 「関西以西の屈折像土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 1992
- (7) 東湯野村教育委員会 『福島県伊達郡東湯野村上岡遺跡』1953
- (8) 賀川光夫 「縄文後期磨消縄文共伴土製品—分銅形土偶の新資料—」『おおいた考古』2 1989
- (9) 柳浦俊一 「山陰地方縄文後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』第17集 2000
- (10) 穂積裕昌 「縄文時代後期の壺形土器について」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV 1992
- (11) 石見町教育委員会 『石見町の遺跡』1983
- (12) 所有者である稲積慎吾氏のご厚意により実物を拝見し、実測図を掲載することができた。
- (13) 小林達雄編『古代史復元3 縄文人の道具』P93 講談社 1988
- (14) 八木光則「いわゆる『特殊磨石』について」『信濃』28-4 1976
- (15) 前掲文献(1)と同じ
- (16) 矢野健一 「神宮寺式土器」『日本土器事典』1996雄山閣
- (17) 川越哲志 「黄島式土器」『日本土器事典』1996雄山閣
- (18) 家根祥二 「高山寺式土器」『日本土器事典』1996雄山閣
- (19) 河瀬正利 「帝釈峡繊維土器群」『日本土器事典』1996雄山閣
- (20) 柳浦俊一 「山陰地方における縄文前期土器の地域編年」『島根考古学会誌』第18集 2001
- (21) 竹広文明 「月崎下層式土器」『日本土器事典』1996雄山閣
- (22) 間壁忠彦・間壁葎子 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 1971
- (23) 前掲文献(9)と同じ
- (24) 島根県教育委員会 「門遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3』1996
- (25) 前掲文献(1)と同じ
- (26) 島根県教育委員会 「貝谷遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書16』2002
- (27) 山本暉久「石棒」『縄文文化の研究9』雄山閣 1983
- (28) 鳥取県教育文化財団 『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』1985
- (29) 帝釈峡遺跡群発掘調査団 『帝釈峡遺跡群』1976
- (30) 庄原市教育委員会 「陽内遺跡」『県道木屋原庄原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1999
- (31) 平井 勝 「縄文後期・四元式の提唱—彦崎K2式に先行する土器群について—」『古代吉備』第15集 1993
- (32) 泉 拓良 「元住吉山式土器」『日本土器事典』1996雄山閣
- (33) 丹治康明 「宮滝式土器」『日本土器事典』1996雄山閣
- (34) 潮見 浩 「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』18号 1960
- (35) 家根祥二 「滋賀里式土器」『日本土器事典』1996雄山閣
- (36) 家根祥二 「篠原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討—」『縄紋晩期前葉—中葉の広域編年』1994
- (37) a. 平井 勝 「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集 1988
b. 平井 勝 「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備』第18集 1996
- (38) a. 島根県教育委員会 「三田谷Ⅰ遺跡」『斐伊川放水路埋蔵文化財発掘調査報告書1』1999
b. 島根県教育委員会 「三田谷Ⅰ遺跡」『斐伊川放水路埋蔵文化財発掘調査報告書2』2000
- (39) a. 前島己基「靱痕のついた縄文式土器の破片」『季刊文化財』31 1977
b. 島根県教育委員会『石台遺跡Ⅱ』1993
c. 江川幸子、内田律雄「石台遺跡の試掘調査—炭化米を出土した縄文晩期の土坑—」『季刊文化財』62 1988
- (40) 鹿島町教育委員会『講武地区県営園地整備事業発掘調査報告書』4 1989
- (41) 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1978
- (42) a. 潮見浩「帝釈峡名越岩陰遺跡出土の縄文晩期靱痕土器」『考古学研究』第15巻第3号 1969
b. 帝釈峡遺跡群発掘調査団『帝釈峡遺跡群』1976
- (43) 岡山県教育委員会『南溝手遺跡1』1995

- (44) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『津島岡大遺跡4』1994
- (45) 岡山理科大学『岡山学』研究会『岡山発！縄文のなぞナゾ最前線』1999
- (46) 岡山市教育委員会『吉野口遺跡』1997
- (47) a. 高橋護「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』1997
b. 亀山行雄「岡山県備前市長縄手遺跡」『日本考古学年報』46 1995
- (48) 前掲文献(47) aに同じ。
- (49) a. 前掲文献(47) aに同じ。
b. 高橋護「縄文時代の粉痕土器」『考古学ジャーナル』355
- (50) 深田 浩 「中国・四国地方の後・晩期土偶」『土偶研究の地平4』2000「土偶とその情報」研究
- (51) 国立歴史民俗博物館 「土偶とその情報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 1992
- (52) 東伯町教育委員会 「森藤第1・2遺跡発掘調査報告書」『東伯町文化財発掘調査報告書第10集』1987
- (53) 岡山県教育文化財団 「古市遺跡群」『教育文化財団調査報告書Ⅰ』1999
出土状況や特徴は担当者の濱田氏に御教示を得た。
- (54) a. 一見すると近畿地方の終末期土偶である「台式土偶」に類似するが、土偶の時期は後期中葉を下らないという。
b. 「台式土偶」の文献：大野 薫 「近畿地方の終末期土偶」『土偶研究の地平4』2000「土偶とその情報」研究会
- (55) 前掲文献(38) aと同じ
- (56) 島根県教育委員会『島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ』2000
- (57) 仁多町教育委員会『肥乃河上考古たより』No.9 2002
- (58) 深田 浩 「島根県頓原町下山遺跡出土の屈折像土偶」『考古学雑誌』第81巻第4号 1998 日本考古学会
- (59) 前掲文献(24)と同じ
- (60) 調査担当者である頓原町教育委員会・山崎順子氏の御教示による。
- (61) 匹見町教育委員会 「ヨレ遺跡」1993
- (62) 匹見町教育委員会 「水田ノ上A遺跡」『匹見地区県営圃場整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書Ⅵ』1991
- (63) a. 鳥居龍蔵 「備中発見の石器時代二土偶」『人類学雑誌』第37巻第6号 1922
b. 磯前順一・赤澤威 『東京大学総合研究博物館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ増訂版』1996言叢社
- (64) 奈良県国立文化財研究所 「福田貝塚資料 山内清男考古資料2」『奈良県国立文化財研究所』第32集 1989
- (65) a. 平井 勝 「縄文時代」『岡山県の考古学』1987吉川弘文館
b. 京都大学文学部 『京都大学文学部博物館考古資料目録』第1部
c. 清野謙次 「津雲貝塚の土器」『日本貝塚の研究』1969岩波書店
d. 大下 明 「津雲貝塚の土偶」『関西大学考古学等資料室紀要』第6号 1989
e. 前掲文献(63) aと同じ
- (66) a. 村上正名 『備後柳津村馬取・下迫両貝塚試掘報告』1971 沼隈郡教育委員会国史研究部
b. 村上正名 「原始時代備南の縄文遺跡」『福山県史』上巻 1963
- (67) 河瀬正利 「芦冠遺跡出土の板状土偶」『郷原遺跡発掘調査報告書』1971 呉市教育委員会
- (68) 広島大学文学部考古学研究室編 『岩田遺跡』1974 山口県平生町教育委員会
- (69) a. 井上蘭子 「西日本の土偶」『古文化論叢』第29集 1993 九州古文化研究会
b. 文献aの中で井上氏は九州地方の分銅形土偶について、後期中葉になると胸部の部分の部分を顔面に置き換え九州独自の分銅形土偶を製作するとしており、この流れが地理的にも近い山口県岩田遺跡の土偶にも影響しているのではないかと考えられる。
- (70) 山口県教育委員会 「台ヶ原遺跡群」『山口県埋蔵文化財調査報告書』第58集 1981
- (71) 山口県教育委員会 『神田遺跡 第1次発掘調査概報』1971
- (72) 前掲文献(50)と同じ
- (73) 片岡 肇 「近畿地方の土偶について」『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』1983
- (74) a. 前掲文献(69) aと同じ
b. 中村健二「近畿地方における縄文時代後期土偶の成立と展開」『土偶研究の地平4』2000「土偶とその情報」研究会